『黒部・底方の声―黒三ダムと朝鮮人』を読み返しながら　　飛田雄一

来る5月23日、富山市で第13回強制動員真相究明全国研究集会（富山）が開かれる。テーマは「語りつぐ強制連行の歴史」。主催は、強制動員真相究明ネットワーク、協賛がコリアプロジェクト@富山／クローバーの会だ。＜富山の報告＞に、1）地域から戦争と平和・人権を考える機会に―『平和と人権とやまガイド』を作成して、松浦晴芳、2）黒部川電源開発と朝鮮人、堀江節子、3）不二越女子勤労挺身隊訴訟闘いの報告、中川美由紀がある。ほかに、＜徴用工問題について＞、＜明治産業革命遺産について＞などについての報告もある。

翌24日には、愛本堰堤～呂野用墓～追悼碑～宇奈月ダムというフィールドワークも計画されている。詳細は「強制動員真相究明ネットワーク」で検索していただきたい。

●

宇奈月温泉では、1993年9月、在日朝鮮人史運動史研究会の関西部会と関東部会が合同合宿をした。合宿終了後、私は朴慶植さん、崔碩義さんと更に奥の祖母谷温泉にもう一泊した。河原の大きな露天風呂は最高だった。神戸大学への韓国人留学生・鄭燦珪さんもいっしょだった。 鄭さんは、阪神淡路大震災のとき自宅が半壊して学生センターに逃げてきたが、その後ボランティアとして活動した。学生センターの留学生支援は彼の「被災留学生に生活一時金をだしましょう」という言葉から始まったのだ。

鄭さんと私は、朴さん崔さんを残して翌朝早く白馬岳に登った。急な登りが9時間というハードなコースだった。今では無理だが、当時下山時に鑓温泉でひと風呂という余裕もあった。

●

富山研究集会での地元報告者のひとりが堀江節子さん、**『黒部・底方そこいの声―黒三ダムと朝鮮人』（1992.12、桂書房）**の著者だ。他に内田すえのさん、此川純子さんが書かれている。

この本を読み返した。３人が当初から共同で調査を始めたのだと思っていたが、そうでなかったようだ。「三者三様に「黒部第三発電所」工事の朝鮮人労働者たちを新聞紙上で追っていた」が「たまたま富山県立図書館で三人が出会って」というのだ。神戸市立図書館で兵庫朝鮮関係研究会の金慶海さんとむくげの会の堀内さんがよく新聞マイクロフィルム機を取り合い（？）していたという話を思い出した。

本書の構成は、以下の通りである。

一章　黒部川第三発電所の建設　　此川純子
二章　朝鮮人遺族たちの半世紀
　　―「黒三」志合谷雪崩事故―　堀江節子
三章　富山県における朝鮮人労働者　内田すえの

「黒部川といえば、日本アルプスに源を発し、日本海に注ぐ急峻な川である。川というより滝、上流は黒部峡谷と呼ばれて風景は絶品であるが、切り立つ険しい谷と冬期五カ月の多量の積雪は人を寄せ付けない。

この滝のような川を利用して大正期より大型の電源開発が行われている。黒部川の数多くの発電所・ダムの中で、通称「黒三」と呼ばれるのは黒部川第三発電所とこれより隧道を通って六キロ上流にある仙人ダムで、半世紀以上前、日中全面戦争開始直前の一九三六年から太平洋戦争に至ろうとする一九四〇年にかけて建設された。この工事には地元や全国各地から集まった人達と共に、はるばる朝鮮からの出稼ぎの人も多く従事していた。」（本書「はじめに」より）

（写真は、右から朴慶植さん、崔碩義さんと飛田）

●

これらの工事が難工事であったことはよく知られて

いる。『高熱隧道』（吉村昭、新潮社、1967）が有名だがここには朝鮮人のことは全く触れられていない。この隧道は、阿曽原谷から仙人谷の間で、140 度にもなったというから驚きである。

事故も多発している。1937 年 7 月 20 に志合谷の上流の日電第三工事現場で不発となっていたダイナマイトが爆発し朝鮮人の土工 1 名が即死し 2 名が重軽傷を負ったという事故もあった。

この調査活動は遺族との出会いが特に印象的である。

1986 年 8 月 25 日の「北日本新聞」のコラム記事がきっかけだった。雪崩の研究者である清水弘さん（当時北海道大学低温研究所教授）が 1985 年 10 月、久しぶりさらに訪ねた黒部渓谷で 40 年ぶりに両親の墓参に来ていた金鍾旭さん（両親と弟が志合谷の雪崩事故で死亡）と「数時間の差ですれ違った」ことから、清水さんが金さんに手紙を出したという。その後 30 通ほど頻繁な文通が行われていたが、そのことがコラムで紹介されていたというのだ。堀江さんは清水さんから金さんの住所を聞いて手紙を書いたのである。そして堀江さんと金さんとの文通は、1988 年 3 月 13 日に金さんが亡くなられるまで続いた。本書には堀江さんと金鍾旭さんとの往復書簡も収録されている。

志合谷雪崩事故は 1938 年 12 月 27 日未明に起こったもので、死亡者 84 名中朝鮮人は 37 名だと言われている。「雪崩は、四階建て宿舎のうち、屋根を飛ばし、三、四階をバラバラにして吹き飛ばした。一、二階はその場に倒壊、当日夕方までに宿舎跡から三十数名の遺体が収容された」（58 頁）。すさまじい事故だったようだ。

堀江さんは金鍾旭さんの死後 4 年目の 1992 年 3 月、此川さん、通訳の上田晃司さん、そして北日本放送の 2 名と金鍾旭さんの命日にソウルを訪ねることになった。そこで、金鍾旭さんの奥様らからいろんな話を直接聞くのである。

●

また 1988 年 11 月、此川さんが富山県公文書館で「御下賜金伝達方の件」という文書を見つけている。此川さんは黒部川電源開発の資料の中に朝鮮人労働者に関するものがあるのではないかと、何カ月も下新川地方の資料を調べていて発見したのである。そして金鍾旭さんは自信が受取人であるはずの拝受証のコピーを請求したが名前を消したものしか入手できなかった。

が、その後 1991 年 12 月、資料請求によって、「受取人の名前が朝鮮名の下賜金の拝受書三五通と義捐金の領収書三六通を、申請通り名前入りで入手することができた」。それにより調査は進展する。堀江さんは、「天皇の見舞金は勲章と同じで、工事中止を求める世論を押さえ、工事続行・早期完成のために、関係者をなだめるための「アメ」だったのだろう」（139～140 頁）としている。

３人の努力の結晶の本書、ぜひ多くの人に読んでもらいたいと思う。（残念ながら絶版で、古書店をネット検索してもでてこない。むくげの会の本はいっぱいでてくるのに・・・）

●

1993 年の在日宇奈月合宿ののち祖母谷から白馬岳に登ったことは書いたが、別に志合谷へも立山から下山したことがある。2004 年 7 月、山仲間 4 人で立山、剣沢、仙人池、仙人谷、そして阿曽原に下った。仙人池への登りはハードだったが、当時の私はすこぶる元気ですいすいと登った。今はその仲間たちについていくのがやっとやっとになっている。阿曽原から上流の仙人谷までが「高熱隧道」にあたる。阿曽原でも 1940 年 1 月 9 日、大雪崩が起こっている。「行方不明二六名（朝鮮人一七名）重軽傷者三五名（朝鮮人二一名）『北海タイムス』」（269 頁）とある。下山したとき、真冬の阿曽原で起こった大雪崩を想像はしてみたがそれはなかなかむつかしい。ここから関電の専用鉄道が欅平まで走っている。高熱隧道に続く岩盤をくりぬいたトンネルだ。登山客はそれに乗せてくれない。阿曽原から欅平まで急斜面に作られた水平歩道を更に 5 時間歩いて欅平についた。